

血行動態的には、全例で圧較差が 20mmHg 以下であり、また上肢の高血圧症が存在した症例もみられず満足すべき結果であった(図6)。

III. ま と め

大動脈縮窄症24名に対し、アンケートによる術後長期予後と、3才未満の症例で、縮窄部切除、端々吻合を施

行した10症例で、心臓カテーテルによる吻合部の成長と血行動態的検索を行った。

アンケートによる予後調査では前述のごとく概ね良好であった。

血行動態的には満足すべき結果をえたが、吻合部の成長は充分えられておらず、今後さらに経過を観察していく必要があると思われた。

大動脈縮窄症について

東京医科歯科大学第二外科 浅野 献一

昭和40年より51年までに新潟大学医学部第二外科で手

表 1

	例数	病院死	遠隔死	不明	生存確認
管前型	3	0	0	0	3
管後型	9	1	1	2	5
対向型	1	0	0	1	0
C/A症候群	7	6	0	0	1
計	20	7	1	3	9

術を受けた症例は20例であった。手術成績と遠隔成績は表1の如くである。

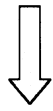
C/A 症候群の成績が不良であったが C/A+PDA+VSD はこの内2例のみで、1例を救命でき今日も元気であるが、他の5例は更に複雑な奇型であった。合併奇型として PDA を有する管前型を含めた単純型14例の成績は良好で、1例手術時38才症例が4年後に死亡したが死因は不明であった。他の生存例は凡て生活に何らの支障なく、元気に生活し、内1例は妊娠分娩を経過している。

大動脈縮窄症手術予後調査

大阪大学第一外科 川島 康生, 秦 石賢

1976年までの coarctation 症例(放置例も含む)は、27例で、術後死亡4例、遠隔死亡1例を除く22例にアンケートを発送。19例(87%)より回答を得た。19例の手術時年齢は、17日~47才11ヵ月、平均15才3ヵ月、調査時年齢は3才4ヵ月~50才11ヵ月、平均21才4ヵ月、術後追跡期間は2年10ヵ月~17年3ヵ月、平均6年6ヵ月であった。病型別では、simple coarctation 5例、atypical coarctation 2例で、他の12例は、VSD, PDA etc の、他の奇型を合併していた。19例中11例では coarctation 修復術を行い、他の8例では subclinical という理由で coarctation を放置した。coarctation 修復例11例の術式をみると、6例で、人工血管による大動脈再建術、

4例で、大動脈端々吻合術、1例で、上行一下行大動脈間に、人工血管バイパス作成術を行った。修復術を行った11例中、10例で、上肢収縮期血圧をみると、術前 168~240 mmHg。平均 192 mmHg より、遠隔期 110~180 mmHg 平均 140 mmHg と下降した。4例で、遠隔期になお 150 mmHg 以上の高血圧がみられたが、2例では、使用人工血管が細かった為、他の2例では、再建部位狭窄以外の因子が考えられた。修復例11例について、アンケート結果をまとめると以下の如くである。児童4例では、全例、身体的、精神的発育は順調で、元気に通学している。成人例7例では、1例を除き、全例、職業をもち(主婦3人を含む)通常の社会活動を行っている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和40年より51年までに新潟大学医学部第二外科で手術を受けた症例は20例であった。手術成績と遠隔成績は表1の如くである。

C/A症候群の成績が不良であったがC/A+PDA+VSDほこの内2例のみで、1例を救命でき今日も元気であるが、他の5例は更に複雑な奇型であった。合併奇型としてPDAを有する管前型を含めた単純型14例の成績は良好で、1例手術時38才症例が4年後に死亡したが死因は不明であった。他の生存例は凡て生活に何らの支障なく、元気に生活し、内1例は妊娠分娩を経過している。